

倉橋惣三の保育思想の研究

——その成立・展開・継承をめぐって——

下山田 裕彦

はじめに

を投げかけずにはおれない。

(一)

一人の人間がどのような信仰・思想をもって生涯を生きるか、という問題はどうでもよい問題ではない。生涯をつらぬく信仰・思想を生きたるということは、とりわけ知識人にとっての試金石である、と言ってもよいのではなからうか。倉橋惣三（一八八二—一九五五年）は言うまでもなく戦前、戦中、戦後と日本の保育界に君臨した代表的知識人である。最高級の日本の知識人の一人である倉橋惣三は一体、どのような信仰・思想をつらぬいて生涯を過ごしたのであるか。倉橋を思う時、私はいつもこのような問

若き倉橋が内村鑑三（一八五九—一九三一年）とめぐり合い、内村の思想的影響の下で、青年時代を過ごしたことはよく知られている事実である。問題は倉橋が内村の福音信仰をどのように把握したかである。この点について、私はすでに若干の考察・分析をした。(1)ここでは、その時、考察の対象とすることの出来なかつた別の資料を用いて、倉橋の信仰・思想の内実が彼の保育思想の形成にどのように影響を与えたかについて論述したいと思う。

次にかかげる倉橋の初期の論稿は、若き日の倉橋が内村とどのように関わっていたかを示しているであろう。

感謝の三日

今井館開館式及び本誌百号

感謝会

倉 橋 生

今井館前のアーチは杉の葉の緑に撫子の紅を彩つて、静粛と雍和の氣を表して居る。静かなる感謝の集あは今日から三日つゞくのである。今井館の開館式は第一日（六月五日）午後二時より行はれた。抑も故今井樟太郎氏の遺志を記念せんが為に其令夫人によりて此館の建てられたのは去年であつた。今日は故人を追悼紀念すると共に、此館をあらためて神の聖前に獻げんとするのである。会するもの凡そ五十。グンデルト夫人によりてオルガンは奏せられ、讚美歌は合唱され、聖書朗読、内村先生の祝禱、次に故人の知友諸氏の談話があつた。特に小林鏡之輔氏が古き昔を回顧して、故人の信仰の歴史を語り、其当時小林氏が若き今井氏の為に如何に熱心に祈りしか、又如何に驚くべく其祈りが聴かれしかを語られた時には、聴く者皆今日此館あるの源を遠く／＼思んだことである。楯間に懸れる故人の肖像はいつも乍に和氣こぼれなんとする温容、今日は一人に活くるが如く見ゆる、否、誠に目には見えざれども故人の靈は此席に臨んで、座にある令夫人と愛嬢と

及び知友の心の声を喜び聴いて居らるる如く感じた。次に河面氏左の感謝の辞を朗読し、続いて内村先生の談話があつた。以下略（『聖書之研究』十一卷六号「明治四十一年六月」より）

『聖書之研究』一〇〇号の記念集会と今井館開館式に、文字通り集会の中心的人物として活躍した倉橋の、信仰の内実を再び検討することにしよう。

感謝会第二日目に、内村によって読まれた詩篇一一八篇・八・九節は次のごとくである。感謝会の第二日目（明治四十一年六月六日）に読まれた箇所を当日も使用されていたと予想される文語体によって引用することにしよう。

（八節）エホバに依頼むは人にたよるよりも

勝りてよし

（九節）エホバによりたのむはもろもろの

候まゐにたよるよりも勝りてよし

右に引用した詩篇一一八篇・八・九節の、イスラエルの詩人の信仰告白を、倉橋もまた、生涯の信仰告白として述べ続けようとしたことは想像に難くない。

ところで、『感謝の三日』と題する倉橋の文章の、最後の件くだりの

一節には次のような感想によってしめくくられているからである。

「終りに内村先生の非戦論と題する講演あり、聴くもの皆雄々しき平和の念に充ち、世界的なる大希望に勇み、茲に感謝の三日を滞りなく、否寧ろ更に新らしき感謝を加へられつつ終った。」

(傍点筆者)

倉橋が内村の非戦論の思想にじかに触れたことは余りにも明瞭なことである。にもかかわらず、倉橋は内村の下を離れ、社会的性格を著しく欠落した保育思想を展開しつつ、日本を敗戦へと導く太平洋戦争の渦にまきこまれ、ついには、その一翼を担う者へと変貌していくのである。⁽²⁾

『感謝の三日』からも、理解できるように、倉橋の信仰の内実が『新しき感謝』にあつたことは否定できないであろう。倉橋の初期の論稿の一つ『新しき心』(選集第四卷所収)にもこのような傾向を読みとることができる。つまり「新しき感謝新しき心」こそ、倉橋が内村の信仰・思想から継承したものである。

『新しき心』の最後の件の一節「願はくば信仰の老いに入るごとなく、信仰の枯死なからんことを」⁽³⁾との若き日の倉橋の決心は、むなしくも裏切られたのである。

何故、倉橋の信仰が、彼の祈りにもかかわらず、枯死してしまつたかについて、くり返す必要はないであろう。ここでは古典的名著『内村鑑三伝』(教文館発行)の著者・政池仁氏の次のような言葉を引用することだけにしよう。

「内村のもとには天下の優秀な青年が林のごとくに、たくさん集まつた。そして誰もかも一度は血を湧かせて彼の教えを傾聴したものである。しかしその大部分は、しばらくすると信仰が冷えて内村から離れ去つた。……文士小山内薫、文士有島武郎、御茶の水大学教授倉橋惣三……彼らを内村は背教者といつて忌み嫌つた」⁽⁴⁾

(11)

内村の門下生の中でも最古参の一人倉橋は内村が背教者として最も忌み嫌つた一人として、今日では評価されている。このことは何を意味するのであろうか。倉橋の、その後の保育思想の形成過程をさぐることによって考察することにしよう。

ここでは、倉橋の著書の中でも社会的性格の濃い児童保護の教育原理をとりあげ、倉橋の保育思想の形成過程をさぐることにしよう。昭和四年に発行された『児童保護の教育原理』の内容構成は次のごとくなつている。

第一章 序論

第一節 児童保護と教育

第二節 児童教育の要義(上)

第三節 児童教育の要義(下)

第四節 児童の自我感情

第二章 幼児期の問題(上)

第一節 幼児保護事業

第二節 幼児期の教育

第三節 託児所と幼稚園

第三章 幼児期の問題(下)

第一節 あそびの生活

第二節 幼児教育の手段

第三節 幼児保育者

第四章 少年少女期の問題

第一節 少年少女の生活

第二節 児童遊園問題

第三節 児童の娯楽機関

第四節 児童クラブ

このような構成からなる『児童保護の教育原理』の提起する問題は今日の問題である。岡田正章氏の解説の言葉をもって概説す

ると第一章序論は児童保護と児童教育が相即不離の關係にあることを解明し、第二・三章は託児所での保育が幼児保護と幼児教育と一体化されたものでなければならぬことを解明し、第四章は一般的な少年少女期における健全育成に必要な施策のあり方について見解を示している⁽⁹⁾、ということになるであろう。

「新しき感謝」「新しき心」を内村の信仰・思想から積極的に学んだ倉橋にしては珍しく社会的問題を取りあげて、「虐待せらるるものは、その紐つなと笞むちから保護せられなければならぬ。それは児童の目の前に迫る不幸である。社会は取り敢えず其の急に赴かなければならぬ。しかも、それと共に忘れてはならぬのは教育である。……兎に角、教育精神を伴はぬ保護は、真に児童の保護といふことは出来ぬ。児童のあるところ、何時でも、何処でも、必ず教育がなければならぬのである」⁽¹⁰⁾と指摘する。

このような彼の指摘はおそらくペスタロッチの教育実践にその原型を見出すことができるであろう。彼は自らを「ペスタロッチに酔える人」⁽¹¹⁾と呼んでいるくらいである。次のような彼の叙述は確かにペスタロッチに酔える倉橋にふさわしい。

「ペスタロッチこそは、実に偉大なる保護事業家であったのである。教育者としての名に於て大をなして居るけれども、ノイホフに於ては農村貧児保護者として、スタンツに於ては孤児の父と

して、今の所謂児童保護に従事したのである。」⁽⁸⁾と。ペスタロッチの教育実践をたたえ、彼にあっては、生活と教育とが一つであったことを、

「生活即教育の真原理に徹底して居たればこそ、児童保護と児童教育とが、ペスタロッチに於て、相離れないものであり得たといえる。」⁽⁹⁾と結論づける。

倉橋が文部省の在外研究員として欧米各国に研鑽を積んだのは大正八―十一年のことである。この時、倉橋が「ペスタロッチ遺跡巡礼」⁽¹⁰⁾をスイスに旅した時の詩情あふるる記録を読むとき、そこに流れているものは「新しき心」を生きた教育者・ペスタロッチへの思慕であることが理解できるであろう。

ところで、今日、ペスタロッチの教育思想や実践の意味を問いつつ直す時、そこには時代の課題と取り組んでいる激しい社会改良家ペスタロッチの姿が浮んでくるであろう。⁽¹¹⁾言うまでもなく、『子供讃歌』にみるペスタロッチの姿は倉橋が解釈したペスタロッチである。換言するならば社会改革者・ペスタロッチではなく、子どもと共に生きた教育者・ペスタロッチであり、同時に、保護事業家ペスタロッチなのである。

このように考える時、社会の真只中で、苦しみ・虐げられている子どもたちの姿に涙しながらも――倉橋の言葉をもって言うな

らば「衣食を欠くものには衣食が給せられなければならない。虐待せらるるものは、その紐と答とから保護せられなければならない。それは、児童の目の前に迫る不幸である」⁽¹²⁾という現状認識に立ちながら、社会の悪にまで立ち入って考察しようとするならば倉橋の保育思想には社会的性格が欠けていると指摘しても正しいであろう。なぜ彼の保育思想に社会的性格が欠落するに至ったかについては既に触れたとおりである。ここでは、倉橋の卓見であった幼稚園と保育所の一元化について述べ、倉橋の保育思想の深まりと広がりについて考えることにする。

『児童保護の教育』第二章・第三節「託児所と幼稚園」には、昭和四年にして、倉橋が今日で言う「幼保一元化」の思想的根拠を示す次の一節がある。

「託児所は幼児の生活保護の分野に立ち、幼稚園は、その祖フレーベルの教育原理を中心として、教育の分野に超然としてゐる観があった。しかも、これは、当然一つのものであるべきである。……しかし生活保護を急とすると否とに拘はらず、其の教育の必要に於ては、如何なる幼児にも同一である……此の意味からして、託児所と幼稚園との融合といふことは理論的には、必ずしも新らしい問題ではないのである。」⁽¹³⁾

ここでは社会的問題である託児所の問題が視野の中に包みこま

れている。これは、昭和四年というこの時期の倉橋の社会的活動、例えば、文部省社会教育官の兼任や中央社会事業協会での活動が社会的視野に立って、保育の問題に取り組ませたということも、その一因かも知れない。問題はなんであれ、倉橋の保育思想が、生涯の中で、最も色濃く社会的性格をうつし出していることに注目する必要があるだろう。この時期を過ぎると、倉橋の保育思想から社会的性格が次第にうすくなり、やがて、日本の軍国主義の歩みと同じくするように、彼の歩みもまた、戦時下保育の指導者へとまっしぐらに進んでいくことになった。

ところで、幼保一元化の問題は今日の日本の保育界にあって、も、やっかいな未解決の問題である。だから、岡田正章氏の次のような一節を読むとき、私は複雑な思いにつつまれる。

「昭和二十二年十一月、東京女子高等師範学校で開かれた第一回全国保育大会に、全国から参集した国公私立の幼稚園、保育所関係者の手で結成されることとなった全国保育連合会の会長に、倉橋は選出され、幼保両関係者が協力して保育事業の普及発達を図ることに寄与する役割をになった。ただ、倉橋の根底には、幼保においては幼児は差別的な扱いをしてはならないという強い信条がひそんでいたが、彼の人柄は、やがて、全国保育連合会が幼稚園と保育所との各々の保育団体に分裂していこうとするとき、

これに身を挺して反対し、その一本化を堅持させようとする程の行動を期待することはできなかった。」⁽⁴⁾

昭和四年には、早くも、幼保一元化の理論的根拠を提示した倉橋ではあったが、今まさに、その実現が可能であった昭和二十二年のこの時期に「身を挺して反対し、その一本化を堅持させようとする程の行動を期待することはできなかった」と言う。人の欲を焼き切る神の義の前に、すべてを投げだすことのなかった若き日の倉橋の晩年の悲劇をみる思いである。

それならば、倉橋の保育思想の消極的な点はなんであったのか。これを、次に考えることにしよう。

(三)

倉橋が日本の保育界に貢献した最大のものは、子どものもつ絶対的尊さを生涯のすべてを傾けて唱道したことであろう。

若き日の倉橋の論稿を資料として次にかかげよう。

聖書と小児

小児 専攻者 文学士 倉橋惣三

世に小児の真価値を認めたもので、キリストのお言葉の如きは

ないと思ひます。吾々は小児の愛らしきことを知つて居ます。丁度美しき花か人形を愛する様に、其柔らかな手や、可愛らしい態度などを見ては、実に可愛くて可愛くてたまらなくなり、又誰れも小児の大切なことを知つて居ます。「白がねも黄金も玉も何かせん、まさされる宝子にしかめやも」(万葉集)とは、昔も今も、又永久に変わらない親心でありませう、我れの後継者として、又第二の国民として、其の大切のものであることはいふ迄もないのであります。併し、小児はたゞ愛らしきもの、大切なものである許りではない、又実に貴きものであるといふことも思はねばなりません。即ち云換れば、我々成人は、一方に小児の保護者となると共に、又一方にはよく小児の眞価値を明かにして、充分に其尊敬すべき点を考へなければならぬと思ふのであります。而して最も眞正に其眞価値を説いて居てくれるものは聖書であります。Ⅱ以下略Ⅱ(『聖書之研究』九卷十三号〔明治三十九年十二月〕より)

このような一文を読むとき、彼の保育思想の成立根拠が明らかにされるであろう。倉橋の愛弟子の一人、津守教授によると「倉橋惣三の幼児教育論は、ペスタロッチ、フレーベル、デュイイ、スタンレー・ホールなど、多くの先駆者に負っているが、もっとも多く負っているのは、子ども自身であることである」⁽⁶⁾というが、私は彼がもっとも多く負っているのは、「聖書の思想と子ども

も自身であることである」と言つてよいと思う。

倉橋が『聖書と小児』にみるような詩的才能をもつて、子どもの心を清らかに美しく描く倉橋に私は無条件に脱帽する。例へば次のような短文には、泣く子どもと共に自分も泣かずにおれない倉橋のやわらかい心情が吐露されているであろう。

泣いている子がある。涙は拭いてやる。泣いてはいけないという。なぜ泣くのと尋ねる。弱虫ねえという。……随分いろいろのことはいいもし、してやりもするが、ただ一つしてやらないことがある。泣かずにいられない心もちへの共感である。(『育ての心』より)

内村のもつ詩人的要素もまた彼に継承されたのであろうか。もっともこのような見解とは別に「彼の诗情豊かなわかりやすい文章と、幼児を見る目のあたたかさには、大正デモクラシーを背景とした自由さと童心主義が感じられる」⁽⁶⁾という指摘も、私は知らないわけではない。にもかかわらず、若き日の倉橋の心情形成に与えた内村の影響をここでは強調しておこう。

ところで、子どものもつ絶対的尊さを根底にした保育の形態は自由にならざるを得ないであろう。倉橋が「いわゆる朝の会集と

いうものを私は賛成し得ません⁽¹⁰⁾と言い、「よく幼稚園で紋切型の『今日の稽古も済みました』を機械的に歌わせて帰らせませうが、……あんな形式的な一斉的な歌の挨拶は私は大嫌いであります⁽¹¹⁾」というのも、その思想的根拠を明らかにするならば、内村から学んだ聖書の思想に触発されたからなのである。『聖書と小児』の中で、倉橋がマタイ伝十八章三・四節の聖書の言葉「まことに汝らに告ぐ、もし汝らひるがへりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ、されば誰にても此の幼児のごとく己を卑うする者はこれ天国にて大なる者なり」を引用していることからわかるように、神の絶対的尊さに根拠をもつが故に、子どもは尊く、神の輝きを宿す存在なのである。このような児童観が次第に明確に若き日の倉橋に形成されたが故に、倉橋は、自由のなかであるかの理解が不徹底的な日本の精神的土壌の真只中で自由保育を展開できたのであろう。太平洋戦争の激化と共に、彼もまた、戦時下保育の唱道者として不幸にも、挫折したけれども、彼が唱道した自由保育は管理社会とも競争社会とも言われる今日の日本の社会の中に根づき、美しい実をつけている、と言ってよいのではなからうか。

(四)

ここでは自由保育を「大地保育」という名称で、展開・実践し

ている野中保育園（富士宮市野中一・二・三、園長、塩川豊子）の実践記録から、倉橋の保育思想が、成立・展開・挫折・再生という歴史を生きながらも、今日の激動の社会に脈々と継承されていることを確かめることにしよう。

自由保育の理論的旗手・塩川寿平は「大地保育」とは、自然環境を最重要視し、大地を土台に展開される自由保育方式の総称で創立以来二十五年の実践と理論の高め合いのなかで、同園園長塩川豊子により『汲みつくすことのできない宝庫である大自然にいとむなかで、子どもたちが育てられていく保育』と唱えられた名称である⁽¹²⁾と言う。

「子どもたちが育てられていく保育」の中でもどろんこ遊びは最大特徴の一つであらう。

塩川の解説に耳を傾けることにしよう。

「どろんこほど不思議な魅力を持つものはない。きらいな子どもがいないのである。雨上がりの水たまりを見つけさえすれば、子どもの目は輝き、たちまちいたずらが始まる。……私たちは、不思議でならなかった。そのナゾは、子どもの立場に立って観察することによって明らかにされた⁽¹³⁾」

子どもをおとなの管理から解放し、子どもに自由を与えることが自由保育の最大使命であるが故に、解放と自由を保障する、ど

ろんこ保育」を、われわれは注目してよいであろう。子どもの立場に立って保育することによって、子どもたちが解放され、自由の主体とされるに至る経過をたどることにしよう。

塩川は「どろんこ保育」が子どもたちをとりこにする理由を次の四点に要約して説明する。⁽⁹⁾

(一) 気持ちがいいのである。手を入れ、足をいれ、体さえもつけて子どもたちは土の感触を楽しんでいる。どろんこ遊びは感覚的な快感があるのである。

(二) 汚れてみたいのである。思い切り汚してみたいという欲求である。べったりと全身どろんこで真黒になるなど、日頃、それが許されるのだからおもしろくてたまらない。

(三) 気楽さである。何よりもどろんこ遊びは特別な技術を必要としない。……誰にでもできて、どのように遊んでもよい自由さがある。……相手が真黒になっていく様や、おでこについたどろんこの顔を見ているだけで楽しくなってきたり笑ってしまう。

第四、もうひとつ別な重要な気楽さがある。それは、作品や行為が残らないことである。だから評価される心配がない。「上手である」とか「下手だ」とか「なってない」とか「みっともない」という評価が全くないのである。なんと気楽なことであろうか。

このような倉橋の保育思想に根拠を持つ野中保育園の実践をふりかえてみると、子どもたちがおとなの管理から解放され、自由空間の中で自由にはばたいていく姿に、私は感動する。倉橋の蒔いた種が発芽し、成長し、美しい花を咲かせている。その事実を目の前にしてこれを倉橋の保育思想の継承と言わずして他の適切な表現方法を私は知らない。

日本の代表的な保育研究者の一人・平井信義教授も、倉橋の保育思想の影響下にある。

「倉橋惣三先生に会う日が来た。昭和十五年であった。……午前10時ごろ園舎に着き、園長室に入っていくと、先生は、机の前立っておられた。……『平井君ね、今日は心理学を全部忘れてくれたまえ！』と怒ったような口調で言われた」⁽¹⁰⁾と平井はまず、倉橋とのめぐり合いから説きおこして、昭和二十八年頃を回想しつつ次のような言葉でもって、倉橋の影響の大であったことを述べている。

「……昭和十五年に初めて先生にお会いした日に、『心理学を忘れたまえ！』と言われたことを思い出した。……この先生のお言葉は、その後ますます強く私の心をとらえるようになった。『心理学を忘れたまえ』、そして、子どもに直接ぶつかって、その心を『直観的』にとらえたまえ……」⁽¹¹⁾

このような日本の代表的な保育研究者・平井の言葉を讀むとき、私は倉橋が日本の保育界の中ではたした役割の大であったことを改めて思い知らされるのである。

倉橋の門下生・平井の「子どもの自主性の発達を援助するためには、子どもに『自由』を与えることが大切です。『自由』は、子どもにまかせる保育によって実現されます。それには、自由を束縛している状態から、子どもを解放することから始めなければなりません」⁽⁸⁾という主張に、松田道雄の「子どもが将来今の文化を否定してあたらしい文化をつくるためには、子どものなかに創意をそだてなければなりません。…そのためには、子どものめいめいにもっているものを大事にしなければなりません。子どもが個性をみせてくれるのは、子どもに自由があるときだけです」⁽⁹⁾という主張をかさね合わせて読むとき、倉橋の保育思想が今日の管理社会という時代の真只中で、掘りおこされ、新しい革袋の中で、再構築される必要を認めないわけにはいかないだろう。

おわりに

私は倉橋が内村の下を離れてしまったことを残念に思う。それが為、倉橋は社会的緊張関係の中で、保育の研究を押し進め、という姿勢を欠くに至った。おそるべき勢いで変化していく

日本の社会の中で、保育の実践者・研究者は何をなすべきであろうか。うかうかしては、また、倉橋と同じような誤ちを犯すのではないだろうか。今日は目を覚醒しているべき時である。

註

(静岡大学)

- (1)拙著『幼児保育の基礎理論』の二二四ページ以下
- (2)同右一三七ページ以下
- (3)『倉橋物三選集(以下選集とのみ記す)』四巻、三五六ページ
- (4)政池仁「内村鑑三」五六一ページ 尚、政池の解釈によると、倉橋は小山内薫と共に内村の門下生の中でも最有力者であった、という。同著、五六二ページ
- (5)『大正・昭和保育文献集』別巻一五〇ページ
- (6)同右 八巻二ページ
- (7)『選集』三巻一三八ページ
- (8)(9)『大正・昭和保育文献集』八巻十六ページ
- (10)『選集』一巻 一一四ページ
- (11)この点については、拙論「ベスタロッツチ研究―特に『家庭』と『社会』の関連をめぐって―」(静岡大学教育学部研究報告第25号収所)を参照して頂けることを願っている。
- (12)『大正・昭和保育文献集』八巻一ページ
- (13)同右 一六二ページ
- (14)同右・別巻一五五ページ
- (15)津守真「子ども学のはじまり」二六四ページ
- (16)『幼児の教育復刻記念論叢』一三三ページ
- (17)『選集』一巻九三ページ
- (18)同右 一一六ページ
- (19)『大地保育』二四二ページ
- (20)同右 二五一―二六二ページ
- (21)詳細は『大地保育』二六二ページ以下を参照のこと。
- (22)平井信義「児童臨床入門」九二ページ
- (23)同右 一一三ページ
- (24)平井信義他「遊び」とは何だろうか 十ページ
- (25)松田道雄「自由を子どもに」一三三―一三二ページ